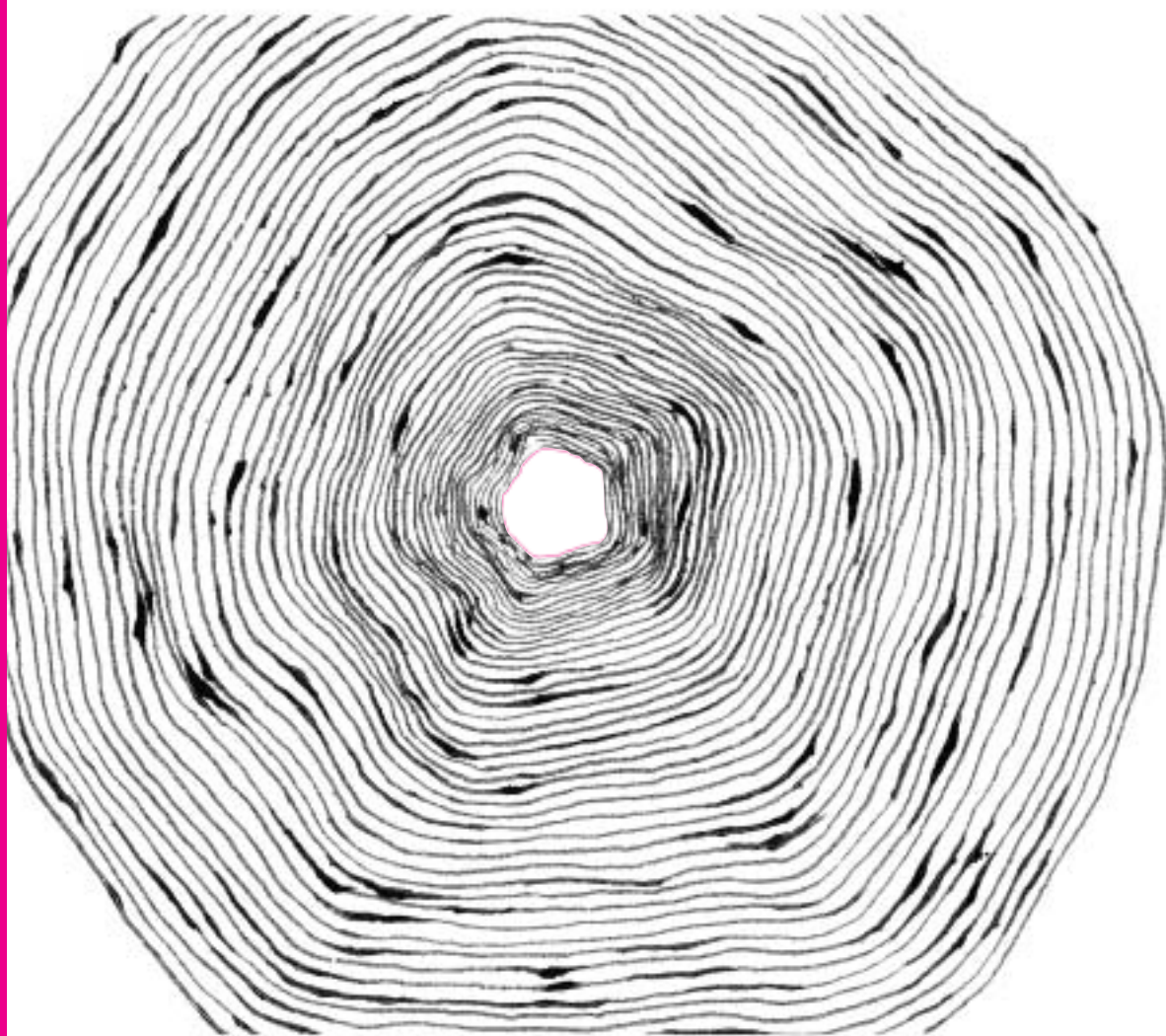


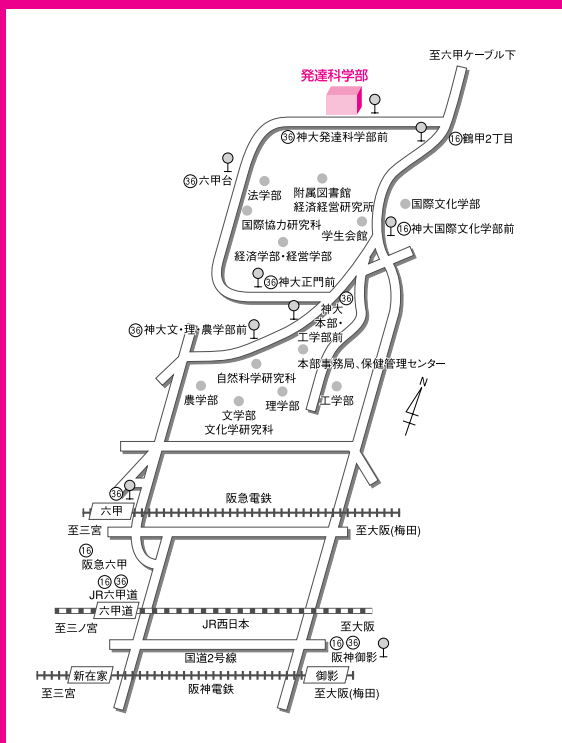
# Annual Report 2005



SUEMOTO, TAMOTSU

Action Research Center for Human and Community Development  
Graduate School of Cultural Studies and Human Development, Kobe University

神戸大学総合人間科学研究科  
ヒューマン・コミュニティ創成研究センター



**【最寄駅】**

JR「六甲道」駅

阪急電鉄「六甲」駅

阪神電鉄「御影」駅

\*いずれの駅からもバス36系統「鶴甲団地」行きで、  
「神戸大学発達科学部前」下車



Action Research Center  
for Human & Community Development

神戸大学大学院総合人間科学研究科 ヒューマン・コミュニティ創成研究センター

〒657-8501 兵庫県神戸市灘区鶴甲3-11 (発達科学部内) TEL:078-803-7970 FAX:078-803-7971

HC CENTER Graduate School of Cultural Studies and Human Science, Kobe University

3-11 Tsurukabuto, Nada-ku, Kobe 657-8501 TEL:81-78-803-7970 FAX:81-78-803-7971

# Annual Report 2005年度

## 目次

### Director's Review 03

センター長挨拶

### Messages 04

祝辞

### Action & Research 06

2005年度研究・実践

### Topics 09

2005年度トピックス

### Collaborators 17

運営協力者・共同研究者

### Outline 18

センター概要

#### ヒューマン・コミュニティ創成研究センター 2005年度 スタッフ一覧

##### センター長

和田 進 (発達科学部長・兼任)

##### 子ども・家庭支援部門

伊藤 篤 (専任研究員・教授)

##### ヘルスプロモーション部門

川畑 徹朗 (専任研究員・教授)

##### 労働・成人教育支援部門

末本 誠 (専任研究員・教授)

##### 障害共生支援部門

津田 英二 (専任研究員・助教授)

##### ジェンダー研究・学習支援部門

朴木 佳緒留 (専任研究員・教授)

##### ボランティア社会・学習支援部門

松岡 広路 (専任研究員・助教授)

##### プロジェクト研究部門

###### ■出版プロジェクト リーダー

太田 和宏 (発達科学部 社会環境論)

平山 洋介 (発達科学部 生活環境論)

###### ■市民の科学に対する大学の支援プロジェクト リーダー

伊藤 真之 (発達科学部 環境基礎論)

##### 事務局

###### ■ヒューマン・コミュニティ創成研究センター 専従事務スタッフ

濱岡 理絵

###### ■のびやかスペースあーち 専従事務スタッフ

尾堂 裕子

# Director's Review

センター長挨拶

## 初年度を振り返って

ヒューマン・コミュニティ創成研究センターは2005年4月1日に総合人間科学研究科の附属施設として発足し、この度、はじめてのアンニュアル・レポートを刊行する運びとなりました。

当センターは、大学が地域や学校、行政、企業等と協働し、人間らしさあふれるコミュニティの創成を目指した、さまざまな実践的研究を行うことを目的としています。発達科学部とその大学院である総合人間科学研究科では、従前より、人間の発達と発達を支える環境について教育、研究してきましたが、その全体を覆うキーワードがヒューマン・コミュニティ創成研究でありました。このようなキーワードを冠したセンターを創設したことは、学部や研究科の特色を明示するという意味もありますが、それだけではなく、今日の時代的、社会的要請に積極的に応えたいという私たちの思いをかたちに表したということでもあります。

科学技術の発展や地球規模でのグローバル化は私たちの生活を大きく変化させ、暮らしの利便性、快適性を増しました。ところがその他方では、改めて、人間らしい生活や環境とは何か、人間らしい発達とはどのようなことか、という素朴で根源的な問題を問わざるを得ない事態も生まれました。ヒューマン・コミュニティ創成研究センターは、人間と人間のつながり、人間と環境のつながりに注目し、今世紀にふさわしい「人間らしさ」を追求する拠点でありたい、と願っています。

2005年5月25日には、当センター創設を記念するシンポジウムを開催し、学内の教員、学生はもとより、多くの市民の皆様参加を得て、総勢500名を越える盛大な会をもつことができました(P.09参照)。また同時に開催した記念講演には、神戸市にゆかりの深い内橋克人氏をお迎えし、地域や社会のあり方そして大学と市民、地域の協働について、深く、熱い思いを語っていただきました。内橋氏の表現をお借りすると、当センターは「街に出る大学」としての一つの試みであります。2005年9月には、旧灘区役所の跡地を借用し、サテライト施設「あーち」を設置しましたが、この施設はまさに「街に出る大学」の先端に位置するものであります(P.10~11参照)。

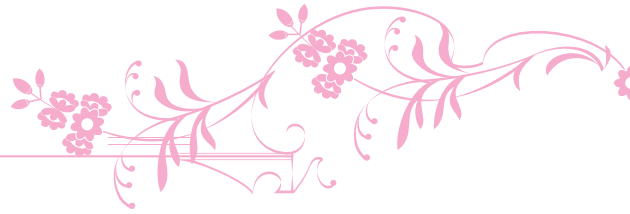
本アンニュアルレポートはヒューマン・コミュニティ創成研究センターおよびサテライト施設での2005年度、1年間の実践・研究を記録したものです。創刊号として、多少の気負いと不慣れがありますが、私たちが「街に出る大学」として、この1年間に何を行ったのかを記載しました。多くの皆様方から、忌憚のないご意見やご叱正、さらにはご支援をいただくことができれば何よりの幸いに存じます。



和田 進  
(発達科学部長・兼任)



# Messages



**コミュニティの参加とエンパワーメントは教育の営みの中核、そのことに着目したHCセンターの理念に期待します。**

Participation and empowerment of communities in an educative process will still continue to play a vital role in growth and transformation of a learned society during this century. The concept in the creation of the Action Research Center for Human and Community Development (ARC) is indicative of Kobe University's search in sharing responsibilities, vision, and development schemes among every element in the Japanese society, thereby ensuring that economic growth and social development are in placed.

**教育の営みが直面している困難と闘うためには、さまざまな関係者との協働が不可欠であり、HCセンターがめざす大学とコミュニティとのパートナーシップのモデルは先駆的です。**

Cooperation and partnership among stakeholders are among the best efforts in creating unified force to combat various challenges facing the educational sector today. ARC caters to real life situations in the community brought about by various changes in the social spheres across sectors at the same time insuring growth and development in the quality of programs the university is offering. This is a model concept of university-community partnership and outreach program that other countries hoped to emulate.

**研究・教育の展開と、地域社会の力の結集の双方を支援する総合人間科学研究科の発展を祈念します。**

With this, I extend my Congratulations to the Graduate School of Cultural Studies and Human Science to have embarked a project that supports both the academic educational processes and social cohesiveness in the local community. This great effort has considered new roles in education and new demands in a world of accelerating economic and social tensions.

Again Congratulations and More Power to the Organization.

ユネスコ UNEVOC本部  
エフィソン・レオナルド・ムンジャンガンジャ博士  
DR. EFISON LEONARD MUNJANGANJA  
UNESCO-TVET Program Specialist  
UNEVOC Headquarters  
Bonn, Germany





※本アニュアルレポートの発刊にあたり、当センターに関連のある海外の機関から、祝辞をいただきました。

**人間はネットワークを紡ぐことで強くなれます。他者に対して配慮したり支援することで、私たちは人間的な存在になれます。問題を抱えている人を理解し支援しようという組織は、決定的に重要です。HCセンターの創設は、そういったことを示唆してくれます。**

As humans we are not islands but are strong together as part of interweaving networks of relationship and communities. Together we build health services, classes, grow food to eat and even make bicycles and cars to move around. Our care and support for others is one of the things that make us human and we should celebrate this. What could be more important therefore than a center committed to understanding and enabling such support for others; particularly for those who for whatever reason are in some way marginalized from the rest of society or are experiencing some health or social difficulty? In this context it is inspiring for there to be an Action Research Center for Human and Community Development at the University of Kobe.

**他者への配慮のための指針、国際・国内・地域の多様なレベルで、さまざまな人たちが支援しあう方法、有効な新しい取り組みやサービスの提供、年報創刊に際して、これらのことをめざすHCセンターをお祝いします。**

The Center provides a beacon for what we should all be concerned for, the care of others. It makes an international and national political statement about what is important. It provides an international, national and regional facility place where research specialists, practitioners and users of services can develop our knowledge and understanding of the needs of different members of society and how we can all help each other in the most effective ways. It is part of the local community providing a focus for the development of local initiatives and services to provide practical advice and help.

Congratulations therefore to the Action Research Center for Human and Community Development on the publication of its first annual report.

**ロンドン大学  
デイヴィット・ゴフ教授**

DR.DAVID GOUGH,  
Professor of Evidence Informed Policy and Practice,  
Director, Social Science Research Unit, Institute of Education,  
University of London



※日本語は抄訳です。

# A & R

## Action & Research

2005年度研究・実践

### HCのA&R

ヒューマン・コミュニティ創成研究センター（HCセンター）開設初年度だった2005年度は、センターの内実をつくる実践的研究（アクション&リサーチ）を、ハード面での基盤整備も含めて多様に展開しました。さまざまな実験的試みによって、社会的実践の波を率先して起こし、社会的課題に関わる研究に取り組むベースをつくりあげようとしてきました。

#### 2005年度のストラテジー

私たちのとりくむ実践的研究は、研究者や実践者の多様なネットワークをつくることから始まりました。そのネットワークを活用しながら「プログラムモデル開発」「実践者支援」という2つのカテゴリーに分類できる多様な実践内容の構築をします。さらに、それらの実施を通して新しいネットワークの形成が図られます。こうした「ネットワーキング」→「プログラムモデル開発」「実践者支援」→「ネットワーキング」といった循環によって、実践的研究の共同体をつくっていくことが私たちの今年度の戦略目標でした。そしてこのような実践的研究の遂行によって、ヒューマン・コミュニティ創成研究センターのミッションである、「さまざまな組織や個人と連携しながら、人間性にあふれた多層・多元的なコミュニティの創成をめざす研究」が可能となると考えています。

#### 実践的研究の共同体

プログラムモデル開発

実践者支援

ネットワーキング

次ページから、研究・実践の概要をご紹介しますが、各プロジェクトのさらに詳しい情報として、下記のような資料を作成しております。ぜひご参照ください。

『ライフスキルを育む 喫煙防止教育 NICE II JKYB研究会(川畑徹朗・西岡伸紀)編著 東山書房』(ヘルスプロモーション)\*1  
『心の能力を育てる JKYBライフスキル教育プログラム 中学生用レベル1 JKYB研究会(代表:川畑徹朗)編著 東山書房』(ヘルスプロモーション)  
『「いのちを実感し親になることを考える体験学習」プロジェクト報告』神戸市委託事業報告書(子ども・家庭)\*2  
『児童館におけるドロップインセンター「ふらっと」の試み』部門報告書(子ども・家庭)  
『日本福祉教育・ボランティア学習学会第11回こうべ大会発表要旨・論文集』(ボランティア)  
『労働・教育支援部門定例研究会ニュース』No.1~No.8(労働・成人教育)  
『あいち通信』No.1~No.6(子ども・家庭・障害共生)\*3  
『アートと学び』(障害共生)  
『地域と連携した大学の新たな展開』『月刊社会教育』No.601、2005年11月、pp.66-71  
『地域と大学との協働による社会的ネットワークの創成』『マナビィ』No.56、2006年2月、pp.20-23

\*1 JKYB研究会のホームページURL  
<http://www.5c.biglobe.ne.jp/~jkyb/>  
\*2 WEBページで閲覧できます。  
<http://www.rie.h.kobe-u.ac.jp/~hc/project.html>  
\*3 WEBページで閲覧できます。  
<http://www2.kobe-u.ac.jp/~zda/arch-prep.html>



ヒューマン・コミュニティ創成研究センターのミッション  
さまざまな組織や個人と連携しながら、  
人間性にあふれた多層・多元的なコミュニティの創成を  
めざす研究の遂行

## 1.プログラム・モデル開発

特定の社会的課題を解決する手法として、人間の発達や認識変容を促すプログラムの開発を行っています。プログラムモデル開発の効果は、プログラム実施の成果ばかりでなく、プログラム作成や実践グループの組織化、プログラム実施の中で起こる非意図的な副次的効果も重要だと考えます。そこで、プログラムモデルを次のような幅広い視点から追究しています。

- プログラムが前提にしている価値についての原理的な探求
- プログラムと当該の社会的課題との関係の記述と分析
- プログラム実施のための条件づくりについての記述と分析
- プログラムを実施した際の効果測定
- うまくいかなかった事例も含めたプログラム作成過程の記述と分析
- 汎用可能なプログラムモデルの開発

## 2.実践者支援

人間の発達を支援する人たちや、学習者、ボランティア等の活動を支援することを通して、実践者のエンパワーメントをめざすとともに、実践者支援の方法、実践の意味づけや課題について追究しています。

- 実践者に必要な技能や知識に関する追究
- 実践者の社会的位置や実践の内在的分析
- 実践者支援プログラムの開発・実施・効果測定
- 実践者支援の多様な方法についての考察
- 実践者支援を通じた研究成果の実践化と普及

## 3.ネットワークング

特定の社会的課題をめぐって、組織や個人のネットワークを形成することで、多元的な新しい実践的研究のフィールド創成をめざしています。ネットワークングは、実践的研究の基盤整備という意味もありますが、そればかりでなく、新しい実践を生み出したり、新しい課題を提示するというネットワークング自体のもつ価値にも着目します。



# Action & Research

2005年度研究・実践

## 1.プログラム・モデル開発

### 喫煙、飲酒、薬物乱用防止教育プログラムの開発（ヘルスプロモーション）

ライフスキル形成を基礎とする喫煙、飲酒、薬物乱用防止教育プログラムの2年生版を開発し、新潟県岩船郡の某中学校の2年生を対象として実施した。2006年3月には、教育校と対照校の2年生を対象とした質問紙調査を実施し、有効性を評価した。

### 書による社会活動プログラムの開発（労働・成人教育）

「知的な障害のある成人の生活と表現」をテーマにした、書作表現ワークショップの開催。2005年3月に、国際文化学部の魚住和晃教授と共同で実施された。障害・共生支援部門と共同して進めてきた、ライフ・ストーリーの成人教育への応用実践の一部である。

### ライフストーリーの成人教育への応用（労働・成人教育）

ライフ・ストーリーの応用を軸にした、成人教育実践者との成人学習の方法論の開発に関する、共同研究の開催。月一回のペースで、社会教育・企業内教育・農業改良普及員・保健師などの各領域での実践報告を受け、その方法論についての分析と討議を行った。

### 教師のためのセクシュアルハラスメント防止研修プログラムの開発（ジェンダー）

「悪意」がない場合でも、「パワーの違い」があるところではセクハラが起ることを理解するための研修プログラムを開発中。伊丹市の女性施策市民オンブードサポーターズによる教員調査などの協力を得て、目下、試案を構想している。

### 親と子のくつろぎ空間「ドロップイン」事業（子ども・家庭）

2004年度からの継続事業である六甲道児童館における子育て期の親のためのドロップイン（広場事業）を2005年度も1年間（週1回ずつ）にわたり実施した。2004年度の成果は、ヒューマンコミュニティ創成研究センターのHPに報告書として公開されている。2005年度の成果は、今年度中に公開予定である。なお、この事業がモデルとなり2006年度より尼崎市内で同様の実践がおこなわれている。

### 神戸市委託事業「平成17年度 命の感動体験」（子ども・家庭）

2006年2月17日・24日（計3セッション）、灘区内の小学6年生を対象に、「小さな命に対する理解と共感性を高め、子育てをおこなう親に対する肯定的態度を育成すること」を目標とした短期学習プログラムを実施した。この成果は、ヒューマンコミュニティ創成研究センターのHPに報告書として公開されている。2006年度は、サテライト施設「あーち」において、神戸市からの委託にもとづき、長期学習プログラムの実施と評価をおこなう。

### 音楽の広場（障害共生）

2005年9月より毎月1回サテライト施設「あーち」で行ったプログラム開発事業。音楽の力を最大限に引き出すことのできる場をつくり、参加者相互の関わりを活性化し、「共生」の理念に近づけることをめざす。学生や地域住民がプログラム開発に参画している。



書による社会活動プログラムの開発



「平成17年度 命の感動体験」にて

# 5月25日 開設記念シンポジウム

2005年5月25日(金)ヒューマン・コミュニティ創成研究センターの設立を記念するシンポジウムを開催しました。当日には、兵庫県知事、神戸市長、神戸大学長、同窓会(紫陽会)の他、多くの関係者、NPO、NGOなどの来賓に列席いただき、第一部として「開設記念式典」を行い、第二部として「地域と大学のプラットフォーム」と題した記念シンポジウムを開催しました。

シンポジウムでは、神戸にゆかりが深く、また、HCセンターが目指す「人間らしい社会の形成」に通底する発言を重ねてこられた内橋克人氏をお招きし、「人にやさしい社会づくり・神戸からの発信」と題した記念講演をいただきました。内橋氏は、神戸大学が地域協働の研究センターをつくる意義について、また今日の社会について鋭く、深い分析をお話くださり、280名収容の会場は「立ち見」が出る盛況ぶりでした。



開設記念シンポジウムポスター

その後、参加者は「子育て支援を契機とした共生のまちづくり」「思春期の危険行動の防止」「大人は人生のどこで学ぶか」「福祉教育・ボランティア学習の可能性と課題」「このごろの女の子、男の子」「市民の科学と大学」「キャリア・サポート」「数理科学と音楽の融合」という8つの分科会に分かれ、熱心な討議を行いました。分科会では地域と大学の結びつきはもとより、従来には

珍しい「数理と音楽」の結びつきなど、新たな学問の創造を予感することができ、HCセンターおよび発達科学部への期待の高さをうかがうことができました。当日には学生、教員はもとより、多くの市民の皆様が発達科学部まで足を運んでくださり、総計500名を越える人々がご参加くださいました。この場をお借りし、参加者皆様への御礼を申し上げます。



内橋克人氏記念講演



学長あいさつ



**後援:** 兵庫県、兵庫県教育委員会、神戸市、神戸市教育委員会、尼崎市、伊丹市、宝塚市、明石市教育委員会、伊丹市教育委員会、神戸新聞社、サンテレビジョン、京都市女性協会、兵庫県社会福祉協議会、神戸市社会福祉協議会、兵庫県人権啓発協会、神戸市PTA連絡協議会、兵庫県子ども会連合会、兵庫県地域労使就職支援機構、全国農業改良普及支援協会、大阪ボランティア協会、神戸YMCA、CAPセンター・JAPAN、被災地障害者センター、たんぼぼ作業所、チャレンジひがしなだ、コミュニティ・サポートセンター神戸

二〇〇五年九月、開館を記念してオープニングセレモニーが開催されました。数多くの大学や地域の人たちの協力によって、さまざまな楽しいパフォーマンスに彩られました。三百人もの参加者に会場いただき、みんなで「あーち」の前途を祝いました。

## あーちのたびだち



【左】アフリカンドラム（灘区民ホール）【中上から】氷のプレゼント・おはなしの世界【右上から】みんなで音楽・アクションペインティング



## あーちと地域

設立の準備から日常的な運営や参加、さまざまなプログラムの展開や利用など、たくさんの地域の人たちの力が「あーち」をさらにおもしろい場所に使っています。「あーち」に集い「あーち」を支えることを通して地域に新しい関係が生まれるという姿をめざしています。



【上】人形劇  
【右】トライアルワーク



手づくりおもちゃの会



【上から】うみ in あーち・あーちアートプロジェクト・らくがきおぼさん



【左・下とも】うみ in あーち（展示学実習）



## あーちのプログラム

「あーち」では、日常的にさまざまなプログラムが展開しています。その多くは、個々人の自己表現や、いろいろな人との交流に重点を置く自由なプログラムで、それぞれの年齢や状態に応じた発達の支援につながっています。

「あーち」は、2004年に移転した灘区役所庁舎の跡地を活用して、2005年9月に開設したヒューマン・コミュニティ創成研究センターのサテライト施設です。「国立大学法人神戸大学と神戸市灘区との連携協力に関する協定書」（2004年12月2日）に基づき、2005年1月からHCセンターに「設立準備委員会」を発足しました。委員は、神戸大学発達科学部の教員や学生の他、地域づくりや子育てなどに関心のある市民、行政や各種団体の職員などによって構成されました。委員会では、「あーち」の名称や理念、間取りや運営方法などについて活発な意見交換がなされ、「あーち」の輪郭についての決定がなされました。

「子育て支援をきっかけにした共生のまちづくり」をめざす実践と研究を進める拠点として、開館当初から30～100人の住民や学生などが訪れ、さまざまな利用をしています。

### ふらっと・あーち

施設のある板の間のフリースペースです。ここでは、主に乳幼児と保護者がゆっくり遊びます。欧米で展開しているドロップインセンターをモデルとしたもので、子どもの対象年齢を限定せず、好きな時間帯に好きなように子どもと一緒にくつろげる自由な空間を提供しています。また、気軽に話せる子育てに関する知識・技能を豊富に有する相談員を配置することを通して、通常の支援プログラムや施設・機能を利用できない母子や孤立しがちな母子を支援する取り組みでもあります。研究面では、効果測定やモデル開発を通して、より実効性のある実践の普及をめざしています。

### のびやかスペース あーち

- 住所：神戸市灘区神ノ木通3-6-18
- 交通：阪急六甲駅、JR六甲道駅、各15分
- 三宮、阪急王子公園駅、JR六甲道駅から市バスあり「将軍通」バス停下車すぐ（灘消防署の建物の2階）
- 開館日：火曜日～土曜日（祝日は休み）
- 開館時間：10時半～17時（金曜日は18時半）





## あーちのまいにち

乳幼児を中心とした子どもやその親、ボランティアの住民や学生、教員などにぎわいます。子どもを中心に交流の輪が生まれ、さまざまなプログラムで新たな発見や感動が生まれたりしています。

## 実践的研究を進める拠点として

# のびやかスペースあーち

ヒューマン・コミュニティ創成研究センターのサテライト施設として、二〇〇五年九月に誕生した「あーち」。神戸市灘区と神戸大学との協定に基づいた全国的にもユニークな取り組みです。大学・行政・たぐさんの組織や個人が協力して、「子育て支援をきっかけにした共生のまちづくり」をめざす実践的研究の拠点です。



【上】ふらっと子育て支援  
【右】あーち看板



【上】ふらっと風景  
【下】あーち玄関ドア



【左】水族館がやってきた(展示学実習)【中上】なまこと踊ろう(地域こども教室)【中下】アクションペインティング【右】サイエンスプログラム

## あーちと大学

大学がいろいろなおとなと協力して、地域において実践的に研究、教育活動をする場が「あーち」です。結果的にその営みが大学の地域貢献になっていくという姿をめざしています。プログラム・モデル開発や実践評価といった実践的研究や、実習やボランティア学習といった学生の教育も、「あーち」の重要な活動です。



### あーとあーち

住民の自己表現活動を支援するしくみも充実させています。さまざまな造形活動を通してコミュニケーションを深めるスペースです。

### こらぼあーち

この多目的室では、造形作品を展示したり、音楽活動を行うことができます。これらのスペースを最大限に使って、さまざまなワークショップを日常的に開催しました。自由な自己表現活動を活性化させることを通じて、表現しようとする人と、それを支援しようとする人、また表現を鑑賞する人が出会って相互承認を獲得していくことを目的としています。研究面では、こうした自己表現活動などを介した、社会的排除を受ける傾向にある人たちの居場所づくり、関係づくりの手法について、効果測定やモデル開発をめざしています。

### 情報コーナー

利用者の方々が必要な情報を主体的に受発信するコーナーです。

その他にも、環境やサイエンスについて多面的に知っていくための取り組みや、学生の体験型の学習を支援する取り組みなども行っています。今後も、多方面の専門家が実践的な研究の拠点として活用しながら、相互にネットワークを広げていきたいと考えています。

【ホームページ】

<http://www2.kobe-u.ac.jp/~zda/arch-prep.html>

# Science Cafe KOBE

サイエンスカフェは、街のカフェなどでコーヒーを片手に気軽に科学の話題について語ろうという試みです。1998年にイギリスで始められ、さまざまな街にひろがっています。

私たちは、ヒューマン・コミュニティ創成研究センターのプロジェクト「市民の科学に対する大学の支援」の取り組みのひとつとして、神戸の街に「文化としての科学」を根づかせてゆきたいという願いから「サイエンスカフェ神戸」をはじめました。

第1回を灘の酒蔵「神戸酒心館」のホールで開催。その後、街のおしゃれな喫茶店はもちろんのこと、北野の美術ギャラリーや、美術館、博物館の喫茶店などさまざまな場所をお借りして開催してきました。



2005年度には、こんな話題をとりあげて、11回開催しています。

相対性理論は間違っているか？      最初の生命はどこで生まれたか？  
ニュートリノと宇宙      神戸周辺の水と環境      量子と素粒子の世界  
アートとサイエンス(1)ー大地と鉄ー      数学とテクノロジー  
地球温暖化問題を考える      量子コンピュータって何？      素粒子と宇宙  
太陽系の科学一月・惑星の世界      これからの科学者  
スポーツとテクノロジー      What is ラジオあくていびてい？

小学生からはじまって、さまざまな年代の方々、隠れ科学ファンの主婦の方、リタイアした技術者の方、学生、OL、友達どうしで、ご夫婦で、親子で、兄弟で、・・・、いろいろな方がご参加くださっています。

私たちは、「神戸の街では、いつもどこかの喫茶店で科学が語られている」、そんな未来を思い描いています。



サイエンスカフェ神戸ホームページ: <http://scicafe.h.kobe-u.ac.jp/index.html>

# Action & Research

2005年度研究・実践

## アートを介した共生のまち創成（障害共生）

サテライト施設「あーち」において、さまざまな芸術家などの協力を得ながら、地域文化の継続的な活性化支援を行った。また、地域文化活性化の意図をもったギャラリーを、大学のカリキュラムと関連させて展開した。この事業は文化庁からの助成を得ている。

## 公開講座「大学で自分の世界を広げよう～知的障害をめぐる社会的課題解決に向けた本人と大学の知との協働～」（障害共生&労働・成人教育）

2005年12月10日と18日、知的障害のある人の保護者を対象とした教育的ライフヒストリー実践と、本人向けのレクリエーションと音楽のプログラムを行った。社会的排除と関連した学習機会提供、大学の研究と教育を有機的に関連させる試みである。

## サイエンスカフェ神戸（「市民の科学」プロジェクト研究）

科学技術的課題に対する市民のエンパワーメントの社会的仕組みに関する実践的研究の一環として「サイエンスカフェ神戸」を創始した。市街のカフェなどの場で、科学者と市民が科学技術の話題について語り合うもので、平成17年は10月以降11回実施した。



公開講座「大学で自分の世界を広げよう～知的障害をめぐる社会的課題解決に向けた本人と大学の知との協働～」

## 2.実践者支援

### 発達科学部公開講座「健康教育ワークショップ」（ヘルスプロモーション）

思春期の危険行動の防止に関心を持つ専門職を対象として、ライフスキル形成を基礎とする健康教育の理論と実際について体験的に学び、指導に際して必要なスキルを形成することを目的とした公開講座を、2005年10月と2006年3月に開催した。

### 発達科学部公開講座「専門職のための子ども家庭支援講座」（子ども・家庭）

2006年3月4日・11日・18日（計6セッション）にわたり、子どもの発達や子育て支援に関連する専門職30名を対象に、学内の教員6名が講師となり、子どもや親の育ち・子育てにかかわる現代的な諸課題をさまざまな学問的視点から解決する糸口や専門職間の連携に関するビジョンを提供した。



公開講座「健康教育ワークショップ」

### 人権教育公開講座（ジェンダー）

阿久澤麻理子さん（兵庫県立大学、助教授）をお招きし、フィリピンの人権教育に関する公開講座を開催した。日本では意識啓発に重点がおかれているが、フィリピンでは制度化を図るなど、両国の視点の違いを学びあった。

### 「障害のある人たちが地域で当たり前で生活するためのたまり場づくりセミナー」（障害共生）

2006年2月12日に、障害のある人たちの生涯にわたる地域生活を支えるインフォーマルな関係づくりの拠点モデルを創設し、関係づくりの手法やプロセスについて実践的に研究し学びあう場を開催した。先駆的事例を集め、報告者を交えて討議や情報交換を行った。

# Action & Research

2005年度研究・実践



社会教育主事講習会

## 公開研究会「脱・音楽“療法”」（障害共生）

人々の、日常的に音楽に関わる新しいあり方について、音楽に接する新しい場作りを志している音楽家に情報提供してもらい、論議した。プログラムモデル開発として実践している「音楽の広場」と有機的な関連をもった公開研究会である。

## 知的障害のある人たちのセルフアドボカシー支援（障害共生）

知的障害のある成人が社会にある矛盾を認識し、それを社会に対してアピールしていく活動を組織化し支援している。月2回の定例会の他に、多様な体験イベントの支援、自分たちの生活世界を地域に伝えることを目的とした新聞発行の支援を行った。

## 神戸大学社会教育主事講習会（労働・成人教育）

文部科学省委嘱事業として、自治体の教育委員会事務局で働く社会教育主事になるための、資格付与のための講習会を開催した。近畿一円の府県から34名が参加し、6月27日から40日間の講習会を受講し、全員が無事終了した。

## 3. ネットワーキング

### ネットワーキング・イニシアティブ

#### 自治体・市民との連携（ジェンダー）

市民・自治体・大学の連携によるプログラム開発の一環として、「伊丹市女性施策市民オンブード・サポーターズ」が行った「教員向けセクハラ防止研修」アンケート調査の結果について、教育委員会の関係者も交えて振り返り検討を実施した。

#### 成人の学習に関する実践・理論的探究を進めるための異業種支援者集団の形成（労働・成人教育）

成人の学習に関する方法の開発を目的とした、社会教育・企業内教育・農業改良普及センター・保健師・NPO・放送大学などの「現場」で実践に取り組む支援者が協同した、実践的な研究組織をつくり活動を始めた。今後も、さらに「現場」の枠を拡大する予定。

#### ボランティア協働セミナー（ボランティア）

年4回、学外の組織と連携して、ボランティアを育む環境や方法について検討する研究会を開催した。平均参加者は20名。PHD協会、大阪ボランティア協会、長田区社会福祉協議会のリーダー・スタッフからの問題提起を受けて、ボランティアの原理・創出方法について討議した。今後も、新しいネットワークの構築をめざして、このセミナーを開催してゆく予定である。

#### 学校を核とした次世代育成ネットワークの構築（子ども・家庭）

神戸市委託事業「平成17年度 命の感動体験」を、神戸市灘区保健福祉部、灘区内子育てサークル「ぷりぷり」、神戸市北区の助産院が主宰する「いのち語り隊」、神戸市立福住小学校との連携によって実施した。2006年度は、複数の小学校からの参加者を募集し、長期的なふれあい体験を実施する。これを、地域の資源および学校を核とした次世代育成事業・研究のためのネットワークに発展させていく予定である。

### 子育て支援1次予防ネットワークの発展（子ども・家庭）

2004年度から2005年度にかけて、六甲道児童館およびサテライト施設「あーち」において、神戸市灘区保健福祉部および神戸市社会福祉協議会・六甲道児童館、神戸市灘区内の8保育所（分室を含む）、神戸市東灘区NPO法人マザーズサポーター協会との連携によって「ドロップイン事業」を実施した。今後も、さらに多様な機関・団体等と連携を図り、地域の1次予防を中心とした子育て支援ネットワークの充実を図っていきたい。

### 環太平洋ヘルスプロモーションネットワーク（ヘルスプロモーション）

青少年のヘルスプロモーションに関する国際共同研究を目指している。その第一段階として、台湾国立教員大学大学院生命教育・ヘルスプロモーション研究科のYa WenHuang教授と、日本と台湾の児童生徒のライフスキルの比較研究プロジェクトをスタートした。

### 環境プログラム開発（障害共生&「市民の科学」プロジェクト研究）

子どもから成人まで楽しみながら学べる環境プログラムの開発をめざして、神戸市環境局、佐川急便株式会社、株式会社キャリアリンク、有限会社ひょうご環境科学研究所と連携し、「のびやかスペースあーち」での実践的な研究会を組織した。

### 障害児者居場所づくり事業（障害共生）

障害のある人たちのインフォーマルな地域生活支援システムの開発をめざして、社会福祉法人たんぽぽ、NPO法人くじら雲、NPO法人あとからゆっくり、NPO法人地域生活研究会、NPO法人颯爽JAPAN、チャレンジひがしなだ、フレンド、NPO法人拓人と、「のびやかスペースあーち」で協働実践を進めた。その際、神戸市灘区からも助成を受けた。

### 地域子ども教室支援事業（障害共生）

文部科学省の委託事業として、NPO法人コミュニティ・サポートセンター神戸、NPO法人神戸子どもと教育ネットワークに協力を得ながら展開した。

## 連携・協力

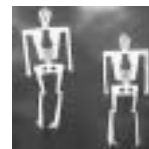
- 神戸市保健福祉局の市民福祉調査委員会に参画した。（障害共生）
- 神戸市立多聞東中学校での学校エコ改修と環境教育事業に、環境教育研究会座長として参画した。（障害共生）
- 2005年7月より、神戸阪急百貨店が運営する子どもの遊び場「ポルトバンビーニ（2006年3月24日開設）」のコンセプトとそれにもとづく内容づくりに関して指導・助言を継続的におこなった。（子ども・家庭）
- 福島県、茨城県、福岡県の各教育委員会と共同して、ヘルスプロモーションの指導者養成のための研修会の計画を立案し、実践した。（ヘルスプロモーション）



環境プログラム開発



地域子ども教室支援事業





## 理論構築支援の場としての

## ヒューマン・コミュニティ創成研究センター

HCセンターは、「実践者支援」「プログラム・モデル開発」「ネットワーク・イニシアティブ」などの具体的活動を通じて直接的に実践に貢献するだけでなく、そうした活動の意味や原理を理論的に総合化してゆく役割も担っています。いわば、より普遍的・原理的な知見を理論化する場づくりも、HCセンターの重要な使命のひとつです。そこで、今年度は、そうした使命を果たす一歩として、日本福祉教育・ボランティア学習学会第11回こうべ大会（2005年11月25日・26日・27日、於：神戸大学）の開催を支援しました。

### 実践者と研究者の協働によるプロセス作り

この大会は「研究者のための、研究者による研究大会」ではありません。福祉・共生社会の創造を志向する実践者と研究者の協働を基本原理とするものです。今回は、社会福祉・ボランティア活動・教育実践関連の研究者だけではなく、社会福祉協議会職員、社会福祉施設職員、NPOやボランティア団体のリーダーやスタッフ、企業・労働組合関係者など、実践的課題を追究している人たちの大勢の参加によって実行委員会が組織化されました（総61名）。HCセンターは、ほぼ月に一度の定



例研究会の運営をはじめ、研究課題ごとの作業グループによる学習会をサポートするとともに、大会開催事務局ワークを集中的に引き受けました。実行委員相互の交流と協働をサポートし、新たな研究・実践の創造の基礎であるネットワークを形成しようとしてきました。

### 課題をアンカー（礎）としての交流促進

「ともに創ろう共生の社会—被災地からの学び」を大会テーマに、以下のような視点または課題で論議がなされました。「教育改革の10年の検証」「障害のある人とともに創る福祉教育」「ワークショップの質的検討」「ボランティア学習におけるシニア世代の役割」「高大連携と高校福祉科」「当事者性の位置」「実践方法に関する比較研究」「ライフステージと壮年期」「評価の位置」です。これらの課題を、議論の中心に据えることによって、互いの実践や研究課題を交差させてきました。

### 新しい研究・実践の交流への支援

アクションリサーチ・参加型研究を基本に、いくつかの研究活動が立ち上がっています。「ワークキャンプ研究会」「ファシリテーション研究会」「スタディ・ツアー研究会」などです。新たな視点と融合的な領域とを交差した研究的・実践的研究を、組織・運営の面からもサポートし続けることが、HCセンターに科せられた課題であると認識し、今後もこうした研究・実践のネットワーク化を促進する活動を展開していきます。



### ネットワーク（共催・後援・協力団体）助成

#### 【共催】

兵庫県教育委員会  
兵庫県社会福祉協議会  
ひょうごボランティアプラザ  
(アイウエオ順)

#### 【後援】

兵庫県  
神戸市  
神戸市教育委員会  
神戸市社会福祉協議会  
滋賀県社会福祉協議会  
京都府社会福祉協議会  
大阪府社会福祉協議会

奈良県社会福祉協議会  
和歌山県社会福祉協議会  
京都市社会福祉協議会  
大阪市社会福祉協議会  
兵庫県経営者協会  
日本労働組合総連合会兵庫県連合会  
(順不同)

#### 【協力】

明石市立高齢者大学校あかねが丘学園  
あとからゆっくり  
大阪市ボランティア情報センター  
大阪ボランティア協会  
神戸まちづくり研究所  
神戸YMCA  
コミュニティ・サポートセンター神戸

コラボねっと  
生活協同組合コープこうべ  
長田区社会福祉協議会  
兵庫県子ども会連合会  
兵庫県ボランティア協会  
ひょうご市民活動協議会  
JPCom

OAA 野外活動協会  
PHD 協会  
(アイウエオ順)

■ 阪神・淡路大震災10周年記念事業から助成を受けました。

■基幹研究部門

学外 ※所属は2005年3月末現在

浅井 淳子\* (伊丹市女性施策市民オンブード)  
 浅間 満佐子  
 小豆澤 千穂\* (明石市立高齢者大学あかねが丘学園)  
 新崎 国広\* (大阪教育大学)  
 池田 真理子\* (福山市教育委員会)  
 池見 宏子 (NPO法人神戸子どもと教育ネットワーク)  
 石崎 和美\* (むこがわCAP)  
 石原 佳子  
 一居 明子  
 井上 富美子  
 岩崎 麗  
 植戸 貴子\* (神戸女子大学)  
 上村 和子 (国立市議会)  
 魚住 絹代 (大阪府教育委員会訪問指導アドバイザー)  
 大澤 欣也\* (人権擁護委員)  
 大西 雅裕\* (湊川短期大学)  
 大野 須美子  
 小川 旦  
 小河 洋子\* (伊丹市女性交流サロン)  
 小田 桐和代  
 折出 健二郎\* (貝塚市立中央公民館)  
 加地 倫子  
 勝野 眞吾\* (兵庫教育大学)  
 川島 弓枝\*  
 菊地 美伽  
 北 郁雄\*  
 北林 稔  
 北村 米子\* (京都市立深草中学校)  
 切山 彰\* (㈱富士ゼロックス総合教育研究所スペースアルファ神戸)  
 桑原 英文\* (JPcom)  
 河野 尊\* (研究会「職場の人権」)  
 小島 篤子  
 小林 繁\* (明治大学)  
 坂井 満\* (甘木市立南陵中学校)  
 坂田 雅亜子\* (社会福祉法人たんぼぼ)  
 佐々木 寛\* (広島市立瀬野川中学校)  
 澤田 幸代  
 末本 やすみ\*  
 杉本 恵美子  
 須田 和\* (尼崎市立女性・勤労婦人センター)  
 砂田 枝里\* (伊丹市女性交流サロン)  
 住吉 八重子  
 高島 昭\*  
 高島 順子\* (チャレンジひがしなだ)  
 高橋 爾 (NPO法人あとからゆっくり)  
 竹村 安子\* (元大阪府社会福祉協議会)  
 橋 裕子 (ぶちばんそー)  
 立岡 佐智央

田中 賢作\* (フリースペース「SAKIWA」)  
 近森 けいこ\* (名古屋学芸大学)  
 塚本 武\* (富里市立浩養小学校)  
 寺地 邦子\* (伊丹市立鴻池小学校)  
 寺村 ゆかの (神戸常盤短期大学)  
 堂馬 英二\* (ワークスタイル研究所)  
 外川 澄子\* (足立区立平野小学校)  
 中井 サチ子  
 中正 勝  
 中野 均\* (朝日村立塩野町小学校)  
 永原 郁子  
 鍋嶋 一弘\* (兵庫県立嬉野台生涯教育センター)  
 並木 茂夫\* (川口市立十二月田中学校)  
 西岡 伸紀\* (兵庫教育大学)  
 西村 恵子\*  
 西村 いつぎ\*  
 丹羽 康子 (NPO法人くじら雲)  
 沼館 園子\*  
 沼館 和明  
 納富 千佳子  
 野口 緑\* (尼崎市役所国保年金課 健康支援推進担当)  
 能勢 伸子\*  
 野橋 順子 (NPO法人生活支援研究会)  
 原田 正樹\* (日本福祉大学)  
 春木 敏\* (大阪市立大学)  
 平湯 秀子  
 藤本 優子\* (神戸市まち育てサポーター)  
 堀内かおる (横浜国立大学)  
 前田 真弥子  
 増田 恭子  
 樹見 和孝\* (放送大学兵庫学習センター)  
 峯田 美香\* (NPO法人アートフルF)  
 三村 裕一\*  
 宮木 昭\*  
 向井 真千子\*  
 村上 元良\* (綾部市立中筋小学校)  
 森 太輔 (NPO法人あとからゆっくり)  
 八島 麻美子  
 山根 健也\*  
 山根 弘子\*  
 横須賀 俊司\* (広島女子大学)  
 吉田 聡\* (大津市立堅田小学校)  
 吉本 尚子\* (兵庫県立男女共同参画センター)  
 鷲見 有美  
 渡辺 潔\* (朝日村立朝日中学校)  
 渡邊 一真\* (SAL)  
 (五十音順) \*の印は2005年度部門研究員の方です。

学内

【教員】  
 浅野 慎一  
 石川 哲也  
 伊東 恵子  
 伊藤 真之  
 稲場 圭信  
 岩佐 卓也  
 太田 和宏  
 岡田 由香  
 岸本 吉弘  
 木下 孝司  
 佐々木 倫子  
 澤 宗則  
 白杉 直子  
 鈴木 幹雄  
 高橋 真  
 田村 文生  
 塚脇 淳  
 勅使河原 君江  
 中林 稔堯  
 中村 晴信  
 二宮 厚美  
 橋本 直人  
 平山 洋介  
 廣木 克行  
 目黒 強  
 山本 道子  
 若尾 裕

【院生・学生】  
 新井 敏夫  
 生田 美由紀  
 石崎 文理  
 一橋 和義  
 今出 友紀子  
 今西 有希菜  
 岩崎 みすず  
 大藪 明子  
 川谷 和子  
 久門 加代子  
 古賀 溪子  
 小嶋 詠子  
 小林 洋司  
 近藤 佳里  
 清水 伸子  
 杉野 美礼  
 高田 オリエ  
 谷 初  
 張 明順  
 寺田 雄一郎  
 土井 幸子  
 名賀 亨  
 中保 敦子  
 沼田 里衣  
 橋倉 今日子  
 濱田 格子  
 松本 とし子  
 水野 淳子  
 宮脇 真衣  
 安田 育子  
 余田 卓也  
 米崎 瑛子  
 頼田 稔

魚住 和晃 (国際文化化学部)  
 岸本 佳子 (発達科学部附属幼稚園)  
 喜多 淳子 (医学部保健学科)  
 高田 哲 (医学部保健学科)  
 本間 康浩 (工学部)

■プロジェクト研究部門

発達科学部ならではの学際的プロジェクトを縦横無尽に立ち上げます。  
 2005年度は、下記の2プロジェクトが、順調に始動しました。

出版プロジェクト

太田 和宏 (発達科学部 社会環境論)\*  
 平山 洋介 (発達科学部 生活環境論)\*  
 浅野 慎一 (発達科学部 社会環境論)  
 木下 孝司 (発達科学部 児童発達論)  
 白水 浩信 (発達科学部 教育科学論)  
 津田 英二 (発達科学部 成人学習論)  
 橋本 直人 (発達科学部 社会環境論)  
 目黒 強 (発達科学部 児童発達論)

市民の科学に関する大学の支援プロジェクト

伊藤 真之 (発達科学部 環境基礎論)\*  
 小川 正賢 (発達科学部 教育・学習論)  
 武田 義明 (発達科学部 環境基礎論)  
 丑丸 敦史 (発達科学部 環境基礎論)  
 田結庄 良昭 (発達科学部 環境基礎論)  
 田中 成典 (自然科学研究科 地球惑星システム科学専攻)  
 近江戸 伸子 (発達科学部 環境形成論)  
 蛭名 邦禎 (発達科学部 環境基礎論)  
 白杉 直子 (発達科学部 環境形成論)  
 長坂 耕作 (発達科学部 環境基礎論)  
 讃岐田 訓 (神戸水環境研究所 水環境研究)  
 信川 貴子 (ひょうご環境科学研究所)

\*の印はプロジェクトリーダーの方です。

# センター概要

## ヒューマンコミュニティ創成研究センター（HCセンター）とは

ヒューマン・コミュニティ創成研究センター（以下、HCセンター）とは、神戸大学大学院総合人間科学研究科に設立された発達支援インスティテュートのもとにあり、これまで蓄積されてきた研究成果と、地域などですで行われている実践との間に、太いパイプをつくっていかうとするものです。人間の発達支援にかかわる活動を行っている地域組織、NPO、NGO、企業、行政、学校等の人々と連携しながら、研究・実践を深め、人間性にあふれた多層・多層的なコミュニティの創成をめざします。

HCセンターには6名の専任教員がおり、それぞれ基幹部門を運営しています。6つの基幹部門ではさまざまなプロジェクトを展開しており、それらに2つのプロジェクト研究部門（2005年度現在）が加わって、HCセンターの多様な実践的研究を構成しています。各プロジェクトは、リーダーと学内及び学外の研究者・協力者が担っています。

## 一年制履修コース（修士課程）とは

HCセンターと密接に関連する大学院として「1年制履修コース」があります。このコースは、「ヘルスプロモーション」「子ども・家庭支援」「ボランティア社会・学習支援」「障害共生支援」「労働・成人教育支援」「ジェンダー研究・学習支援」のいずれかの領域の実践活動の実績をもつ社会人を対象としています。学生はすでに行ってきた実践活動をより広い視野の下でまとめ、考察することにより、修士の学位を取得することができます。

授業は基本的に夜間に開講し、HCセンターで行っている実践的研究にかかわりながら1年間で所定の単位を取得した上で、リサーチペーパー（修士論文）を提出することが求められます。

社会的実績をもとにした学位（修士）を得たい方、自らの実践活動の成果をまとめて一層の前進をはかりたい方は是非、応募ください。

（詳細は学生掛まで問い合わせ願います。電話：078-803-7924）



神戸大学大学院総合人間科学研究科 ヒューマン・コミュニティ創成研究センター

## 基幹部門の概要



大好きなイングリッシュ・ガーデンにて

**子ども・家庭支援部門**  
担当：伊藤 篤  
ittoa@kobe-u.ac.jp

家庭および家族的機能を有する諸施設の養育活動を支援することを通して、周産期から青年までの子どもとその家族・養育者の発達を促進するための実践的研究を行う。2005年度は「のびやかスペースあーち」において、子育ての一次予防サービスとして「ドロップイン事業」の充実を図り、ライフサイクルに合わせたサービス機能をもつ「ファミリー・リソース・センター」構築の基礎づくりをおこなった。

**ジェンダー研究・学習支援部門**  
担当：朴木佳緒留  
hounoki@kobe-u.ac.jp



部門研究会の様子

ジェンダー問題について、NPOや企業、個人と共同して学習プログラムを開発する。2005年度より3年間は「教師のためのセクハラ防止研修プログラム」の開発に力を入れている。また、子どもから大人までを対象とした、女性のキャリア発達のためのプログラムと評価法の開発、キャリア発達の支援者の育成などに取り組み、「男女共同参画の職場づくり」調査と調査を基にした「職場学習」の方法の開発を行っている。



故郷の桜島をバックに

**ヘルスプロモーション部門**  
担当：川畑徹朗  
kawabata@rie.h.kobe-u.ac.jp

今日の健康課題と密接な関係がある行動に焦点を当て人々が健康を損なう恐れの高い行動を避け、健康を増進する行動を主体的に選択できるようにするための方策に関する研究を行う。具体的には、健康教育と環境づくりの研究である。2005年度は、青少年の喫煙、飲酒、薬物乱用を防止することを旨とするライフスキル教育プログラムの開発と有効性の評価研究を行った。また、危険な性行動を防止するためのプログラム開発のための基礎的作業として、青少年の性行動に関わる要因の分析などを行った。



センター定例会議にて

**労働・成人教育支援部門**  
担当：末本誠  
suemoto@kobe-u.ac.jp

公民館や企業、改良普及センター、放送大学などの社会教育や生涯学習、職業能力の形成など、地域や職場で展開する成人を学習者とする教育活動の学習や支援に関する実践的・理論的研究に取り組む。これらの成人教育の「現場」で、実践者として活躍する支援者と協働して、実践的な理論や方法論の開発を目指す。とりわけ、ライフストーリーを成人教育に応用した、プログラムの開発に力を入れる。

**ボランティア社会・学習支援部門**  
担当：松岡広路  
mkoji@kobe-u.ac.jp



カメラマンは津田先生

社会参加・参画の方法としてのボランティア活動や社会的活動を、インフォーマルな教育または学習の場として捉え、その様態・支援方法などについて研究することが中心的なテーマである。2005年度は、研究の基礎づくりとして、実践者や研究者とともに学会の大会を企画・運営し、ネットワーキング・イニシアティブに力を入れた。また、ボランティア協働セミナー（年4回）を通して、ボランティアや連携の意味を探った。

**障害共生支援部門**  
担当：津田英二  
zda@kobe-u.ac.jp



「あーち」での活動のひとつ

すべての人が排除されずに生活することができる社会づくりのための方法を「障害」、特に「知的障害」の問題を切り口にしながら探る。2005年度は、「のびやかスペースあーち」の建設、共生に向けた各種プログラムの実践・開発、ネットワークの強化に力を注ぎ、共生の拠点モデル開発の足場をつくった。これらの取り組みを通して、地域における多様な住民間の関係形成支援の原理追究やモデル開発などを行っている。